

松村通信第97号

2018年10月6日
松村勝弘

歴史、宗教・哲学

近況 河合ゼミの後輩諸君が集まるという。それで挨拶に来てくれないかとの話し。せっかく出かけるのなら、「松村通信」を認めてお渡ししようというので書き始めた。

リタイヤしてゆとりができたと言えどできた。怠惰な毎日を送っているともいえる。近頃は金木犀の甘い香りが漂っている。甘い思ひ出が蘇る。町を歩いていてもきよろきよろとして、えっこんなところに、こんな建物があつたっけなど、これまで見過ごしていたものに気づいたりすることが増えた。週1日は相変わらず校長を務めているJCLという中国人に日本語を教える日本語学校へ行くことにしている。年3回の入学式と年1回の卒業式での挨拶が主たるお仕事だけど、時々進路指導などもする。志望理由書などをもとにこうしたほうがいいのかをいうわけだ。また、立命館大学の経営大学院（前期）と情報理工学部（後期）で週1コマ講義を担当している。

そして今も、経営学部校友会の副会長として年3回のセミナーや総会に参加して、ときに挨拶をしている。今年はこの10月に仙台で行われる全学校友会の校友大会とのタイアップで経営学部校友会もセミナーを仙台で行うが、これにも行くことにしている。全学校友会の副会長は昨年任期を終え顧問に退いたが、それでも都道府県校友会で挨拶を頼まれることがある。頼まれたら基本断らない。いつからか、都合が付くかぎり何でも頼まれたら断らないことにしている。小学校の同窓会の幹事なども引き受けている。まさに、何でも屋さんである。

今年9月に北海道で行われた日本財務管理学会で統一論題の報告を引き受けた。これも頼まれたら断らない。でもこちらは勉強になる。その機会を利用して自分を勉強に追い込んでいる次第。それにしても、最近は関心がひろがり、歴史や宗教・哲学に目が向いてしまう。知らなかったことが何と多いことか。改めて自分の勉強不足、無知さ加減に嫌気がさす。でも、面白い。新しい発見がある。これだからやめられない。それで、小野塚知二『経済史 いまを知り、未来を生きるために』（有斐閣、2018年）を紹介するといった前号のお約束を果たしておきたい。まさに、先にいった歴史である。といっても、その本をすべて紹介することはできない。

際限のない欲望の果て 人間はなんとという欲張りなんだらう。際限のない欲望をもっている。たしかに欲望があるからそれが経済成長の源であることはたしかだ。しかし中世までは何らかの制約があつたけれど、近代になってそれがなくなった。その結果が自然破壊

あり、資源枯渇である。そんなことが歴史的に縷々述べられている。それでも中世までは掟などがあつたから、欲望は無制約ではなかつた。だから地球がなんとかもつていた。それが今日危機的状況になってきているようだ。

じつは、歴史的に際限のない欲望が危機をもたらした経験を人類はもっている。チグリス・ユーフラティスなど歴史ではかならず習う。メソポタミアやエジプトなど、どうしてあんな砂漠みたいなのに文明が発達したのだろうと疑問に思うけれど、じつは人間が木材を伐採するなど自然を破壊したから砂漠になったに過ぎない（100-108頁）。下記のように簡潔にまとめられている。

資源の枯渇1 「森林伐採の動機は長大な木材の獲得であり、それは前近代社会の富の非生産的な利用（宮殿・神殿建築などの大規模土工事）のためだったが、そうした仕方での富の不生産的な利用が可能になるための不可欠の前提は、農耕牧畜の定着による非農業人口（王・貴族、神官・学者、兵士・役人、職人・商人など）の増大がありました。こうして、森林伐採→農耕牧畜の発展→非農業人口の増大→都市文明→さらなる森林伐採と農地拡大という循環的な経済成長の型にはまってしまった前近代の文明は、富の不生産的な利用のために、ますます多くの富（食料と木材）を生み出さざるをえないという矛盾に陥り、洪水・干害・塩害や表土流出によって、いったんは栄えた文明を滅ぼしてしまっているのです。」（104頁）

このような際限のない欲望が近代をもたらした、経済成長をもたらしたのはまちがいないが、今やそれが限界にきているようだ。ではどうすればよいのか。この点が同書末尾に触れられているが、それを紹介する前に、少し触れておきたいことがある。

資源の枯渇2 岡本隆司『世界史概説—アジア史から一望する』ちくま新書、2018年というのを読んだが、これがまた面白かった。通常世界史といえば、ほとんど西欧中心の歴史観に基づいている。著者はアジアに視点を置いて世界史を論じている。これはこれで面白く、後日紹介したいと思うが、ここで、次のことがいわれていたのを思い出す。歴史はオリエントから始まって、イスラムに引き継がれる。ギリシャ、ローマも当初オリエントを引き継いでいる。後になってヨーロッパが世界を席卷することになる。なぜオリエントやイスラムがヨーロッパに敗退したのか。こう言われている。

「たとえば造船である。文明の古い乾燥地域のオリエント・西アジアで、森林は最も早く枯渇した。イスラムが十字軍は迎撃でき

ても、反攻できなかつたのは、船を作る木材が不足していたからである。」(212頁)

ヨーロッパは後背地に森林地帯を持っていたが、オリエントやイスラムはそれが枯渇していて十分に船を作れなかつた。それがヨーロッパ席捲の一因として紹介されている。まさに、これも際限のない欲望の一つの帰結ではある。では、今日のわれわれに何ができるかである。

可能性 では、小野塚書に戻ろう。「際限のない欲望がありながら、それを厳格に規制したうえで、細々と生きてきたことが、人が長く生存できた原因である」(515頁)。ところが、その規制がなくなった「近代(≒一九世紀)と現代(≒二〇世紀)には、欲望の対象物をより効率的に産み出す方向に技術・生産力・生産組織が文字通り革命的に変化しただけでなく、欲望そのものも制約から解放され、さらに掻き立てられることによって、肥大化してきた」(519頁)。そこに問題がある。では、どういう出口が考えられるか。

第1に、資源争奪戦による文明崩壊を防ぐには「資源争奪が発生しないように人口増加や物財・エネルギー需要の増大を制御すること」が大切だが、資源争奪戦争を防止しなければならない(529頁)。**第2に**、管理社会が考えられる。「個人の際限のない欲望を即時に管理し、また、欲望を適切に維持・創出し、個人の行為・感情までを『望ましい』方向に即時に誘導・介入する社会構造(architecture)を実現できるなら、人類の文明を、文字通り調和(ハーモニー)のとれた形で未永く維持し、かつ成長と資本主義を可能ならしめることができるのかもしれませんが。労務管理と生活管理の究極の姿をそれは示しています。そこには、基底価値としての人格・自由・自律はありませんが、擬似的(ないし構成的)な人格・自由・自律が確保できるなら、それは、介入的自由主義の現代を、新たな人間操作技術と統治技術・思想によって再建することになるでしょう。」(530-531頁)とはいえ、グローバルな管理社会になるのも困る。

第3に、非物財的な経済成長が考えられる。「物財やエネルギーの生産・消費量の増大に結び付かない経済成長のあり方について考えてみましょう。いまの日本で誰もがすぐに思いつくのは、育児や介護などの対人サービスの充実でしょう。いわゆる福祉の分野は社会の重荷、政府の財政負担と考えられがちですが、北欧諸国で実現できているように、新たなビジネス・モデルと雇用スタイルを生み出すことができるなら、それは経済成長の絶好の機会となります。育児と介護に加えて男女共同参画の推進、労働時間短縮と余暇拡大(ワークシェアリングとワーク・ライフ・バランス)、社会教育の充実などの課題を一つずつ解決していくなら、それは着実に経済成長を促し、投資機会をもたらすでしょう。」(531頁)経営学的にも、消費者はモノよりコトを望むようになってきている。これなら物財の消費によらない成長が可能だろう。

第4に、自立した個と他者との関係の再建である。「物財的ではない成長の可能性を探ろうとするなら、……人の主体性と能動性をより精緻に考察することが求められます。」(532頁)「このように、自他二項対立的な主体性・能動性という設定を前提とするなら、釈然としない解き方したできない問題群があちこちにあります。介護、終末期ケア、安楽死のいずれも、自他を截然と分ける『硬い個人』の設定ではなく、人を近い他者との関係性の中で捉える『柔らかい個人』の設定の方が、これらの問題は現実的(actual)に解くことができるはずです。」(534頁)要は、関係性の中で考えるということでしょう。これは西欧個人主義の限界を克服する道でもあるでしょう。

第5に、美的価値・身体的礼の回復が主張されている。「礼などの身体的・美的な徳(virtue)は、近現代社会では貨幣で計られる単一の徳に取って代わられました。礼とは状況依存的、属人的で、多面的な徳でしたが、富の最も抽象的な形態である貨幣が近現代の普遍的な徳となり、単位時間当たりあるいは一人当たりの貨幣という単一の物差しで徳が計られているのです。この結果、前近代社会が許容していた多様性・異種性(diversity)は、近現代にあっては、一つの尺度の中の多様性(variety)へと変じています。」(535頁)これは、きわめて東洋的な解決法だといえるだろう。

第6に、「隠れファシズム」対「小さく弱い規範」という図式で主張されている。「本書の主張をより積極的に表現するなら、大きく強い規範の再建を一挙に目指すのではなく、小さく弱い規範を、美的価値や身体的礼にも注意しながら、一つずつ再建する中で、進化論的(evolutional)に次代を構想しようということです。一挙的な伝統主義・設計主義・合理主義を振りかざして次代を構想するユートピアを唱えるなら、それはほぼ間違いなくディストピア(dystopia)しかもたらさないということが、次代について何ら構想ももてないままに、現代の終焉に立ち至っている理由なのだ」と本書は考えます。中央集権化された権力による上からの管理・支配・開発・近代化に対抗し、不服従、面従腹背、妥協的な共存などを繰り広げて、自由・自主・自律を求める『モラル・エコノミー』や『アナキズム』の叡智……をいま参照するなら、近現代の大きく強い規範によって設定された物差しが見落としてきたところで、小さく弱い規範を実践することが大切であると考えます。」(536-537頁)この主張もきわめて東洋的です。ただ、これが西欧の人たちに納得されるかが問題のように感じる。

HP、FBを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>)もご覧下さい。
フェイスブックもやってます。また、メールで意見
交換しましょう。メールをよこして下さい
(matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。